

《座談会》

同志社と体育・スポーツ

- 秦 芳 江 (女子大学教授)
今 村 宏 (大学経済学部教授)
川 野 弘 靖 (高等学校教諭)
小屋敷 禎 祥 (女子中学・高等学校教諭)
田 淵 和 彦 (大学工学部教授)
高 橋 寛 (京都新聞社記者・昭和46年大学法学部卒業)
- 司会——
仲 村 要 (大学経済学部教授)

——(ABC順)——

“体育・スポーツの草分け”

仲村 きょうは「同志社の体育・スポーツ」についていろいろ皆さんにお話していただくわけですが、最初に女子大の秦先生に、開学以来の同志社の体育、スポーツの歩みの概略を少しご紹介いただきたいと思います。よろしく願います。

秦 それでは年の順で、私がトップを切りさせていただきます。

そもそも私が体育を始めましたのは、終戦のごたごたの時期で、体が大きいのと元気なのを見込まれまして、片桐哲先生に「これからは体育がぜったい必要な世の中になるからぜひやってくれ」というわけで体育の勉強をいたしました。それで、なにか同志社としての体育があるんじゃないか、といった同志社はいままでどういった体育、スポーツをやってきたのかと思いました。そうすると思いがけず同志社は、全国のいかなる大学よりも、体育、スポーツの資料にかけては宝の山でした。

まず驚きましたことは、いままで私自身もあまり知らなかった新島先生と体育との結び

つきでした。その結びつきがその後の近代日本の学校体育の動向を左右したほどの大きなものだったとわかったときはほんとうにうれしく思いました。いままでの同志社の歴史のなかではあまり書かれておりませんことですので、この場所をかりてぜひお話し申し上げたいと思います。

まず世界で一番最初に大学に正課としての体育をとり入れたのはアームストン大学で、一八六一年に当時ウイリアム・スターンズという人が、週に三十分二回の体育を正課としたわけです。それから六年たちまして新島先生がアームストンにお入りになりました、お手紙のなかにもそのアームストンのパレット体育館でいかに学生が楽しく運動をして、また勉強するかということをお書きになっています。ですから世界の青年のうちでも最初に大学の体育を正課として、言いかえれば近代科学として学習なされた数少ない青年の一人だったということです。

その新島先生がもう一つ日本の体育教育に大きな影響を与えたといえますのは、学制が発布されました、いちばんどうやっていいかわからない体育教育の教師を、新島先生と

親交の厚かった田中不二磨という方がアメリカに探しに行かれた。東部の小さな大学であるアームストンに行かれた。当時シリーという学長さんですけれども、新島先生のような立派な学生をよこす日本へは、本校において最上の卒業生を体育の教師に送らなければならぬ、というわけで、新島先生の直接の体育の先生で全米体育協会の初代会長にもなられたドクター・ヒッチコック、その方がまだ若くてきでエネルギーが溢れているときだと思えますけれども、その方と新島先生が相談なさって、高等師範の前身である日本の体操伝習所へ、エドワード・リーランドという人を日本で初めて体育教師を養成する学校の主任教授として派遣されたわけです。もしもそのときに、新島先生がアームストンのなかを紹介しなかったならば、また新島先生と田中不二磨の親交がなかったならば、日本の学校体育の夜明けに、そのようなアームストンの立派な卒業生が送り込まれることはなかったでしょう。

それから、もう一つの新島先生の体育教育家としての一面は、先生が朝晩腕立てふせをなさったり、歩くのをお好みになったり、学

生の野外教育を奨励なさったりということもありますがお弟子たちにはすばらしい体育・スポーツ人を輩出したということです。その一人は、ご存じの安部磯雄先生です。もう一人は、女子部の松浦政泰という方ですが、そのほかにもたとえば岸本能武太、留岡幸助など、新島先生の直弟子の方々がそれぞれ自分の仕事のなかに体育をとり入れていらっしゃるということで、新島先生の残した教育者としての遺産のなかに、いわゆるスポーツ教育活動というものを数え入れてもいいんじゃないかと思えます。

新島先生を終わりました、私が同志社の体育・スポーツ教育のなかでいまあったらいいなと思えますことは、昭和の初年まで続いた土曜日の日休日制ですね。日曜日はスピリチュアルデー、土曜日はフィジカルデー、月曜日から金曜日はメンタルデー、それが同志社の最初のころの学生たちの気風に大きく影響したんじゃないかと思えます。

それから最近調べたところによりますと、同志社大学の予科では、三時になりますと授業が終わっても、学生は帰らずに岩倉や御所へ行って運動した。もちろん文化部の活動も



今村 宏氏

あると思いますが。

それから、戦前は一つのスポーツに縛られないで、つまりシーズン制を学生たちが持っていたこと。冬はラグビーで夏は水泳とか、そういうようなシステムがあったということ、もう復活することはできないかもしれないけれども、オールラウンドプレーヤーがかなりたくさん輩出したということは、同社スポーツの一つの特徴じゃないかと思えます。

仲村 近代日本の体育教育の草分けというか、先進的な役割りを同社がになつていた。新島先生がそういった位置におられたということですね。

秦 新島先生ご自身のスポーツというのは、ハンティングなんです。そのほかアンダーヴァーに行かれたときのお父様へのお手紙

に、川に氷が張って、そこを「子供たちが鉄の靴をつけて踏行致し候、これはことのほかおもしろき遊びにて候」と書いてあるところを見ると、日本人で初めてアイスクスケートをしたのは新島先生じゃないかというようにすることも想像しまして、たいへん愉快でした。

仲村 同社ではラグビーや野球など、いろんなスポーツを非常に早い時期に学校としてとり入れて、クラブ活動がどんどん盛んになってきたという経過があるわけですから、現在同社全体で体育あるいはスポーツがどういう考えで、どのように実施されておるかということになると、どうでしょう。たとえば大学ですと、正課体育と課外体育を両輪として、バランスよくやっつけていこうという形をとっているわけですが、そのあたりは田淵先生どうですか。大学の正課体育、課外体育の現状を紹介していただけませんか。

“体育・スポーツ教育の現状”

田淵 大学の体育教育については、やはり広い場所、施設がどうしても必要なわけで、そういう意味では田辺に立派な施設ができて

て、われわれの理想が大きく膨らんできています。

現在、大学で行っています正課体育は、一年生のときは集団でやるチームプレーを中心に教える。そして二年生になりましたら個人プレーのものをやっつけていく。それらを土台にして生涯体育につなぐという考え方で実技を行っています。

課外につきましても、とくに体育会では、いままでもネットクになっておりましたのは、キャンパスと練習場が離れていたということでした。教育とスポーツが切り離されていくという危険性があったんですけれども、同じキャンパスのなかで学業とスポーツができるというのが、田辺に移った大きな一つの特徴で、そういう意味ではわれわれの描いている一つの理想の方向にスタートしたというのが現状だと思います。

仲村 川野先生どうですか、高校では。とくに同社社の特徴としていつも言われるのは、現在受験競争等々でいわゆる進学校ですと、いろんなことで制約を受けているけれども、同社社の場合高校、それから女子中高、香里、国際、中学校ではそれにわづらわされ

ずに理想的な体育教育、スポーツ活動ができる環境にあるのじゃないかということも耳にしますが、現状はどんなものですか。

川野 高校生の場合には一年生ぐらいまでは身体発達がまだまだなされていると考えまして、むしろ個人種目を中心にやって、二年になってからチームプレーを多く入れていくと。だから一年のときのほうが個人種目の占める割合が多くなっているわけです。二年になると球技系の種目が多くなってくる。三年になると今度それを生かして生涯体育ということをいま田淵先生がおっしゃったんですけれども、それに似たような形で選択で何種目か設置して、それを各人が選択をしてやっていくという形をとっています。

一、二年のときに基礎的なことをやってお



葵 芳江氏

いて、三年の選択学習のときに応用的な、いわゆるゲームに近いような状態というのを授業では考えています。各クラブの動きというものを見ていると、同志社というのは新しいものに対する飛びつきは、ものすごくはやいものがあるわけです。ですからうちの学校で強い種目というのは、フェンシングがいつとかなり強かったとか、あるいはアーチェリーがほとんど毎年全国大会へ行っているとか、そういうようなよそがまだあまりなじんでないような種目をはやくとクラブのなかへと入れて、かなりの成績を残しているのが現状ですね。

ラグビーなんかは、いままで大学と並列で同じグラウンドで半分半分ですべて行いましたので、その影響を受けてOBの人たちのご援助もいただきながら、かなりいいところまではいくんですけれども、いま一步で京都で敗退してしまつ。全国大会へ昔ほど出れなくなつてきていますね。

三年生になりますと、インターハイの府の予選会が終わるともうアップだというような形で、五月から六月ぐらいにクラブから身を引いてしまつ。一部はOB的な存在で後輩の

指導に当たるわけですけども、大半はいままでクラブ、クラブで追いまくられていたのが、今度は勉強のほうに相当力を入れないと、推薦が危ない危ないと脅かされますので、二学期ぐらいからかなり勉強するのも出てきます。ごく一部はそのまま余裕を社会勉強のほうにという者もなきしにもあらずですけども、そういった点で高校から大学へ行って実際にやっているというのが非常に少なくなつてしまつて、その辺が残念です。

だから逆に大学の体育会に入りますと、各府県あるいは全国的にも名前の通った選手がある程度セレクトされて集まつてきて一緒にやるとなつてくると、そんななかへ自分らは入つていけないというコンプレックスみたいなものを若干持つている場合もあるようです。ですから、やっていたうちののぐわずしかしか大学ではやってくれない。しかし、同じキャンパスのなかで練習ができるようになったことで、いままで各地区とか全国でかなり名前を売った選手以外の者が入つていく傾向がたぶんにあるんじゃないかと思うんですよ。

施設の話が出たついでに、大学が田辺へ移



川野弘靖氏

転された後、岩倉でいままで使っていたあの施設が、もう草ぼうぼうの状態になってきている。あれが非常にもつたいなと思いません。できることならもう少し高校でも使いたいなという気持ちをもつてく持つんですね。

スポーツをご理解いただけない先生の場合には、空き地があったらどこでも走つたらいいやないかというようなことを指摘いただくわけですけれども、陸上競技の場合にはスパイク履いて走れるグラウンドというのは、かなりてん圧されて締まった状態じゃないとできない。テニスにしてもそうです。ただ空き地があったら、ネット張つたらいいじゃないかというわけにはいきませんからね。

田淵 いちばん問題になるのはその辺だと

思います。

仲村 一貫性ですか。

田淵 一貫性がないんですよ。たとえば、田辺にいい施設があっても、今出川校舎でやるときは使つたらいいんですよ。それをも田辺にあるからということでもサクを張ってしまう。高校生が隣にあっていては施設があつてできない。よそへ借りに行く。融通性がないでしょう。たとえば女子大で空いておれば貸してあげようとか、中学が空いておれば貸してあげようとかいう、こういう交流があれば、スポーツでもやろうもとする学生が増えスポーツの底辺が拡がっていくと思えますが。

今夏も岩倉高校のフエンシング部が田辺を借りて合宿をやつたんですよ。高校生たちはすごく喜びそして高校の先生も、あのすばらしい環境のなかで生徒たちが練習している姿を見てよこげられる。そして大学の指導者が指導する。そうするとその生徒たちは、大学へ来てこんな施設のなかでスポーツを続けたいという気持ちが出てくるし、技術的にも上達してくるわけです。そこに高校、大学とのつながりができてくるのではないでしょ

うか。

そういう広い心でもつこの施設を開放すればいいんですけども。勿論、いろいろ難しい問題はありますが、その辺のことをもつとオープンにしないと、同志社のスポーツは発展していかないですよ。

仲村 女子中高のほうはどうですか。小屋敷先生。

小屋敷 先ほど仲村先生のほうから受験の制約が同志社の場合はないので、スポーツをやるのに非常に適しているのではないかと、いうようなお話もいろいろありましたけれども、確かにその点でのプラス面はいっぱいありますね。いまごろもう公立の高校三年生だったら、受験とか推薦とか、そういったプレッシャーがありまして練習にも熱が入らないとか、たいてい大きな全国的な大会というのは、いまの時期からあるんですね。そういうものに對しても、「代表に選ばれても」という迷いがあったりというようないろいろい耳に入ってきます。そういう面では非常にプラスになりますね。

一方では負の部分もいくつかあるんじゃないかと思えます。たとえば受験の制約がない

と言いましたけれども、中学、高校に入る時期に受験があるわけですね。ですから運動能力だけじゃない、いろいろな人間の成長する大事な時期に、受験をやっているわけです。そして合格して中高に入ってきて体育系のクラブに所属するという事です。先ほど正課の授業と課外のクラブという問題も出ていましたけれども、自分は得意だから、やりたいからという動機でクラブに入ってくることもありますが、自分ではできないからなんとかやらせてもらおうという感じで入っているといるということもあるんですね。

体育の授業などをグラウンドの片隅で見えていますと、まず一年生の初めの段階でいろいろの体力測定をやるんです。そのとき体育の先生がばやきをたいへん漏らすんです。たと



小屋敷慎祥氏

えばボールを投げる場合でも、ふつうは右ききの場合でしたら左足を前に出して投げるわけですけどもさあ、ボールを投げなさい」というときに、右足を前に出して投げるのが何人もいる。ほかにも例はいっぱいありますけれども、そういう段階からクラブが始まるというのは、高校から大学への受験はありませんけれども、正課の授業でもクラブの場合でも、やはり格差があるというふうに感じております。

そういうなかで、受験がないという面を生かしてなんとかクラブを続けていくわけですけども、これも先ほどの話で、新しいものをどんどんとり入れる利点が同志社には昔からあるということですけども、別な見方をすると、非常に移り気なところがあるんですね。おそらく大学生もそうじゃないかと思えます。自分はこれが限界だと思えばとかわるとか、これはある程度やったから次はこつちをやりたいとか、そういうような面でも高校時代にクラブをやって大学でさらに受け継いでいけば、すばらしい選手に、指導者に、あるいは人間形成に役立つんじゃないかと思ったりもしますが、その辺が高校と大学

の間ではちょっと切れてしまうというようなことがあって、非常に残念に思っております。

施設の面とか人間の交流の面とか先ほどお話が出ていましたけれども、スポーツ推薦の問題があります。一部の先生の話ですと、高校時代ある程度クラブの実績を持っている者は大学でも続けていくような保障が考えられれば、田淵先生の言われるやる気もつとあるんじゃないかと思えます。

推薦で全国から優秀な選手をとられるわけですけども、その推薦に入らなくても、香里や国際やあるいは同志社高校やうちから大学に進学して運動クラブに入るといって、そういう選手もいると思えますね。そういう選手である程度がんばっている例もいくつもあるんじゃないか、そういう面も見ていただきたいと思っております。

“学校体育の理念”

仲村 ところで、最近の社会生活のなかで特に余暇問題や健康との関連で体育、スポーツが重要な位置を占めてきている。これは間違いないでしょう。



田淵和彦氏

ところが、それが学校体育のなかでどのように扱われているかという点になると、体育とスポーツの概念の混乱を含めて、競技スポーツという意味で非常に専門化し、高度化してきている面と他方レクリエーション、レジャー活動として、大変大衆化しているという二つの流れに分かれてきたという感じが私にあるんです。とくに大学では、そのバランスがいまむつかしい時期に来ている。

たとえば、スポーツを純粹に教育的な配慮のなかでやっていこうとすると、高度化、専門化志向が意外と阻害的な条件になる。逆に、高度化、専門化を厳しくねらっていかうとすると、さきの教育的配慮がある種の手かせ足かせのような感じを与えるというようなことがなきにしもあらずというふうに思うん

です。このあたりもむつかしい話になりますけれども、体育会長でもあられる今村先生理念的なものなどのお考えでしよう。

今村 その問題に対するお答えになるのかどうかわかりませんが、先ほどから体育とスポーツとは厳密に言えば違うんだとおっしゃることはよくわかるんですが、あまり厳密に考えなくてもいいということでお話しさせてもらいますと、私は体育会長という職を引き継ぐことになって、まだ日も浅いし、また皆さん方のように専門家でもございませんで、とくに詳しく考えているわけではないんですが、日ごろ考えていることをちょっと申し上げます。

課外体育活動でいわゆる大学スポーツと一緒にしてはいけないのかも知れませんが、大ざっぱに、体育会活動すなわち大学スポーツという言い方をさしてもらいますと、それがプロスポーツあるいは社会人スポーツとどこが違うかといえば、大学スポーツは教育の一環であるという点で非常に大きな違いがあると思うんです。

したがって課外体育活動を通じて、スポーツを通じて心身を鍛え、養い、そしてスポー

ツマン同士で交流を深めることによって、いわゆる人間形成を行うところに大学スポーツの課外体育活動の本質があるのではないかと、またそこに大学スポーツの存在意義があるのではないかと、日ごろから考えているわけなんです。

したがってもう言うまでもないことですけれども、大学スポーツというのは、ただ勝てばいいというものではないと思うんです。確かに競技スポーツである以上、やっぱり勝つことが目的で日ごろからトレーニングに励み、試合に臨まなきゃなりませんけれど、それは結果であって、そのスポーツを通じて、またプロセスにおいて人間形成を養うところに、いちばん大きな意味があると思うっております。

最近では同好会ばやりといわれますけれども体育会ではスポーツが専門化してきて、先ほどからお話がありましたように、ただ好きとただだけではとても入っていけないということがその一つの理由だと思います。体育会へ入ったら大学の名誉を背負って、とにかく勝つことを第一に厳しいトレーニングをやらなければならぬ。それよりは自分の好きなス



高橋 寛氏

スポーツを好きなように楽しみながらやりたいというのが現在の若者の気持ちじゃないかという気がするんです。そういうことがいちばん大きな原因で、体育会へ入ってくる学生が少なくなってきたという現象も起こっているんじゃないかと思えます。

しかし、体育会であれ、サークルであれ、それらは課外体育活動という点で共通しており教育の一環として当然のことながら学業と両立し得るものじゃないといかんと、いつも私は言っているわけなんです。といっても何ももって両立というか、非常に抽象的な言い方ですけれども、一つの目安として言うならば、その学年の平均点ぐらい取れてあたりまえじゃないかと思っております。

スポーツ選手、とくに花形スポーツの一流

選手になりますと、一般の人たちは、一般学生、われわれ教職員もそうですけども、彼ら特殊な目で見がちなんです。いわゆるスター扱いといか、タレントみたいな感じですね。あえて名前を出しませんけれども、同社もいろいろな選手がいますね。そういう選手たちもやっぱり学生であって、大学でスポーツをやる以上は、スポーツ選手である以前に大学生でなければならぬ。したがって形式的にはもちろんのこと、実質的にも大学生であることを放棄したような者にとつては、それはもう大学でスポーツをやる資格がないと私は平素から思っています。

また一流選手の中に、残念ながら華々しい活躍をしながら学業のほうがうまくいかないで、単位が取れないで卒業できずに留年というのがちよくちよく見られます。それに対しても本人もそうですし、また周りの者も非常に甘い見方をしていると思うんですね。彼らは一生懸命スポーツやって、それに打ち込んだんだから勉強ができなくてあたりまえというのを、なんとなしに自他ともに容認するようなところがあるんじゃないでしょうか、私はこれは非常に間違っていると思うん

です。

どの種目についても同じですが、ある程度のレベルまでの選手になるうと思えば、だれでも努力すればなれると思うんです。しかしそのレベルを超えたいいわゆる超一流選手には並大抵の努力ではなれない。それになるためには、気力、体力、それから集中力、技術はもちろんのこと、それに加えて頭脳が大切だと思います。頭の悪い人間では超一流選手になれない。逆の見方をしますと、超一流選手であるということは、すなわちいま挙げた面で、図抜けた能力、潜在的能力を持っていることになります。

したがって彼らが、たとえば大学生として卒業したいにもかかわらず単位が取れなかった、スポーツに打ち込んだために卒業できなかったというのは、これはもうスポーツに甘えているのであって、ほんとうに自分の持っている潜在的能力を自分がやるべきときにきちっと発揮すれば、卒業できないどころか、優秀な学生として十分卒業する能力を持っていると思います。

それに関して一つのエピソード、経験があるんです。二十年ほど前の古い話になります



仲村 要氏

けれども、私、アメリカのマサチューセッツにあるウイリアムズという大学に二年間留学したことがあわます。その大学は全寮制で、同じ寮にアイスホッケーの選手がおりました。彼は非常に優秀な選手でして、全米選抜に選ばれるぐらいの選手でした。

ある日、私、授業に出ていきましたら、その学生の顔が見えるわけです。「どうしたんだ、今日は試合があるんじゃないのか」と言ったら、「いや、自分は授業があるから来たんだ」と。つまり試合のほうを放棄しておるわけですね。授業があるからこちらに来るのは当然だという顔をしておるわけです。また、皆がだいたい夜一時ごろまで勉強しておるんですけど、その学生の部屋だけは二時過ぎまでも電気がついている。「そんなに遅くまで

勉強して、昼間は激しいトレーニングで体を壊さないか、勉強をそんなにしなきゃならぬのか」と聞いたことがありますけれども、その学生いわく、「自分は皆が勉強しているときにスポーツに打ち込んでいます。だからその分だけ遅くまで勉強して、これでやっと人並みで、人一倍勉強しているとはぜんぜん思っていない」と、こういう答えが返ってくるんです。「それはわかるけれども、じゃ体は大丈夫か」と言ったら、「それは自信がある、平素トレーニングを積んでいるんだから、人より睡眠時間が一時間や二時間少なくなっても自分は負けないだけの自信はある」と、こういうふうな答えが返ってくるわけです。

私はこの考え方を聞いたとき、またそれを実行している姿を見て、まさに学生スポーツの理想を見たような気がしました。同志社でも学生と機会あるごとにそんな話をするんですが、なかなかそういうことを一遍に実行しようたつてできるものじゃない。これはよくわかっています。理想であることはわかっていますけれども、アメリカ人でありますが実際にそういう学生がいるのですから、これからの課外活動は、やっぱりそういうふうな理

想に少しでも近づくようにしなきゃならないんじゃないかと思っているわけです。

仲村 この点についてはどうですか、田淵さん。現役時代の超一流プレーヤー、いまはフエンシング界の最高の指導者としてですが、いわゆる専門化、国際化というか、同志社がスポーツの分野でベストをねらう場合の考え方とか指導の仕方とか、そのあたりは。

田淵 問われていることから外れるかも知りませんが、いまちょうど高校野球のシーズンですね。僕も高校時代野球をやっていたので野球は好きなんですけど、いまの高校野球はあまり興味がわかないんですよ。というのは、あまりにも管理され過ぎて、一つの形にはまってしまっておもしろくない。だから僕は監督の行動、ベンチの動きをいつもテレビで見ているんです。

ある監督が、エラーした選手とファイナルプレーした選手の両方を温かく迎えて、全体が次のプレーに向かっていけるような指示をしている姿を見て、非常に感動をしたことがあります。痛む人間の気持ちと同じように痛み、そして喜びはみんなと一緒に喜べる。こういう指導者はすばらしいなと思います。

ほんとうに欲びと悲しみをわかち合える選手と監督、そんな偉大なる監督、いや教育者が数多くなることを期待しているんですよ。優れたチーム、優れた選手をつくりあげるためには、やはり、丹精こめた、育てる心が、必要ですね、とくにそれが学校スポーツである限りは……。

それと、日本のスポーツ人と外国のスポーツ人の間には、まだまだ大きさという点で大きく違いがありますね。ある大学の交歓試合に日本のチームを連れていって、レセプションで両チームの自己紹介が行なわれたときに、日本の選手はどこも大学何年生、それだけなんです。大学と自分の学年しか言えない。ところが外人は、どここの大学で自分の専攻科目はなにで趣味はなにでという自分のキーワードをすごく自信を持って言うんです。スポーツ以外の趣味、専門のものまでが手短かに紹介されるわけです。その辺でまず負けるなという感じがしたことも、もちろん人格的にも大きな差はありますけれども、彼ら一人ひとりが個性が感じられ、一見して運動部学生とわかってしまう日本の学生選手たちとはちがう、「大人」の風格と言うものを感じ

じますね。

その選手のなかに医学生がいたんです。僕は、医学生で選手、しかも世界のトップレベルに出てくる選手はどうやって練習しているのかと聞いたら、通常週三回か四回の練習でおよそ二時間ぐらいの練習である。医学生として一日五時間ぐらい勉強していると言ふ。大変といえば大変であるが、フェンシングが好きだからやめないんだと、そして一単位でも落すと退学になるというきびしさの中で「好きだからやる」というこのさわやかさに大学スポーツの本来の姿を見た感じがした。彼はその年に世界チャンピオンになったんです。ところが次の年の世界選手権には来ていないんです。あんな優秀な選手がどうして来ないんだと聞いたら、彼はいま国家試験を受けていると言ふ。そこでまた僕は、さすがやなあと思つたね。一回二時間ぐらいの練習で世界に通じる力を育てられるのは、一人ひとりの選手たちの自覚とやる気に支えられているからである。自分たちの責任で一人ひとりが個人のトレーニングに練習にとりくむという、「あてがいふち」であってはならない、自分のメニューは自分でつくっていくと

いう姿勢が大切であって、このことがスポーツへの情熱となり、決意となり、さらにプレーに必要とされる自主性、創造性へとつながっていくのだと思います。

▲ 私、田淵先生のおっしゃった外国の選手と日本の選手が違ふ点は、キリスト教のホスピタリティだとか、全人類的なフレンドシップだとか、そういうものの根底が日本の身体文化の土壌にないから、そういつたいいわゆる身体文化イコール精神文化ですけれども、その根底が西洋人とまるで違ふから、そういう意味で馬車馬的な、勝つことが最上の使命だというふうになつてしまふんじゃないか。非常に抽象的な言い方ですけれども、ですから全人教育の意味が問題でありまして、私なりに考えたくても、やっぱり根底にキリスト教があつて、つまり神様と対話ができる創造物としてつくられた私たちの体を、私たちは精神と分離して考えることができない。精神のように身体も鍛えなければならぬというふうななにか一つキリスト教の基盤というのが全人教育のなかに、体育、スポーツにあつてほしいと思います。

“スポーツ・ワールド”

仲村 なるほど、いまお聞きして、それこそ同志社教育の目指すところで、同志社のスポーツマンはそのとおりやらないかんわけですね。でも、現実に大学のレベルでは、同志社でも日本一になれ、オリンピックへ行け、世界を制覇せいと、大きな目標を定めて頑張っている訳ですが、そのために大切なものが犠牲になってはいかんで、ここらが非常にむづかしいですね。

この点、私は体育の現場にいまして、ちょっと悲観的なんですよ。極端な勝敗主義の競技スポーツが教育を超えてひとり歩きしている。いままで教育というおりのなかで、スポーツは模範的で、体育はそれを利用してきた。ところが気がついてみると、そのスポーツがあまりにも大きくなって、教育というおりを破って独自の道を走り出した。日本の学校体育は中高大を通じてその後追いをしているのが現実じゃないかと思うのです。

ここで高橋さんどうですか。いまたくさんの問題が出てくるわけで、たとえば学校体育の問題、それにかかわる同志社の特徴という

か、とくにいま田淵先生とか今村先生の場合は、スポーツ、課外体育の理念を含めて具体的な話が出てくるわけですけども。学生時代にスポーツとくに軟式テニスの分野では超一流の選手で、そして京都新聞へ就職して、一時運動部に席を置きというような、そういう経歴の体育会OBの一人として、いわば外から見た同志社の体育、スポーツというのはどうですか。

高橋 同志社大学で四年間しかかわりはないんですけど、どうしても外から見るといふよりは内側から見えてしまうんです。こういう仕事ですので、ふだんは別席にいて、それをまとめながらそつなく自分の意見をまぶす訓練ばかりしているものですから、ストレートに感想を求められるのはなれてませんが、知徳体というのが同志社の理念で、それで答えはもう出ているような気がするんです。

自分も含めて日本の民族性かどうかわかりませんが、スポーツのとらえ方が欧米なり先進各諸国とは違っていて、武道の一環みたいに、それがすべてで、それ以外は全部だめで道みたいなの、テニスでいえばテニス道、フエンスングでいえばフエンスング道になって

しまいがちで、秦先生が最初おっしゃったシーズン制のように、夏は水泳しながら冬はラグビーというような、むしろ以前のほうがオープンにフランクにスポーツとつき合えたはずなんです。仲村先生の言い方でいうと、ひとり歩きしてしまって、どうもスポーツとうまくつき合えてない集団をどんどん再生産しているような感じがしますね。

私は四十六年に卒業したんですけども、大学がバリケードで封鎖されて、ろくに学年末試験も受けずに卒業したような時期でした。そのころに課外活動してきた者としては非常に複雑な状況がずうっと続いたこともありまして、いろんな実験をやらせていただきました。

先ほどのお話に絡むことでいいますと、同好会とかかわりについて真剣にみんな意見交換をしながら、同じ好きなスポーツを選んでいけるならばなぜ一緒にやれないのかという問題提起が言ってもなく出てきまして、春先にこちらからアプローチしまして、当時の同好会の幹部さんと意見を交わしました。それなら一度試験的に一週間ほどやってみようということで御所で練習をやったこと

があります。できればそのままし崩し的に融合できればいいなとこっちはもくろんでいたんですけど、なかなか思いどおりにはいかずに、結果的にはそのまま別れました。

先ほどからおっしゃっているように、一流になりたい、そうじゃなくて、おれはもうちょっとと自分なりに楽しみたいという、いろんなスポーツに対するとらえ方がある。それぞれの素材を吸収できるような集団にそれぞれが自助努力をもうちょっと積み重ねていけば、ちょっと状況が変わっていくんじゃないかなという期待はいつも持っているんです。

そのころ調べましたんですけど、同好会のメンバーは数が多いですし、しかも施設的にも恵まれておりませんし、練習のやり方も合理的ですし、しかも厳しかったですね。われわれが目指している技術的な訓練よりはもっと高度なものをやっていたり、もっと厳しかったり、そういう意味では体育会のほうが制約が厳しくて、とてもついていけないと思って同好会でやっている人たちは非常に誤解をしていたということをミーティングをしたときにお聞きしました。どうも十分意思の疎通

ができていなかったみたいところがあるんです。その後どういう形で進んでいるのか、またお聞きしたいんですけれども。

同好会の次に今度は愛好会という形でもっと自由にやれるクラブができたとか、そういう意味ではまだ十分整理されていない感じがします。やっぱりスポーツというのが、正課体育も課外体育も含めてですが、どうもまだ未整理な分野ではないかと、つくづく感じられます。それはなにも大学なり中高でがんばっておられる教育現場の先生方がそうであるだけじゃなくて、新聞社においてもそうである、実はうちの新聞も月曜日のスポーツ欄を一面ふやそうと。というのは、試合の記録を収容し切れないんです。スポーツがプロ化、専門化、高度化していく反面で、ママさんスポーツとか、ちびっ子野球やサッカーのように広がっている。そういう記録まで読者が求めているということで、新聞社ですら情報を選択し主体性があまり持てないような状況がいまあります。まだまだこれから整理していくかなあかん分野ではないかなと、思いますね。

秦 この前アメリカの女の体育の研究者の方とお話ししたんですけど、アメリカでスポーツワールドという言葉があるんですね。ご存じかもしれませんがね。スポーツだけの特殊な価値の支配する、つまりほかの人の入り込めない世界がある。そこでは通常のいわゆる価値判断は通用しない。ですからその問題が学校体育及び学校スポーツと絡み合って、スポーツ選手の特権だとか優遇だとか、そういう暗い面が非常に助長されている。それからトレッドとか。ですからそのことは、アメリカの大学競技界において大きな問題だということをお聞きしました。

さっきから話を聞いていますと、非常にダイクサイドばかりなので、ちょっと私ね、いわゆる同志社スポーツって、もっと明るい朗らかな面を期待していましたので、話を交えてもいいでしょうか。

仲村 どうぞ、どうぞ。

秦 昔、「同志社ボーイ」という形容詞がありましたね。たぶん田淵先生のお父様の若いころでしょうけど、そのころ同志社ボーイというイメージは、スポーツマンというのが入っていたんですよ。そのころの卒業生の方々にお聞きしますと、同志社ボーイ、同志社

ガールのイメージというのはスポーツマン。それで非常に明るくて余裕がある。社交的だった。たぶんそのころの大学生というのは、経済的にも楽にやれたんだと思いますけれど。いま同志社大学にはそういうムードはありませんか。その明るい、さわやかな非常に友好的なプレーヤーという。

田淵 本来スポーツというのはそういう友好的なものなんです。スポーツマンシップというのはやはりルールを守り、そして相手を尊重し、試合が終わったら仲間となるというのがスポーツマンシップなんです。ただ、技術、体力、こういうものがどんどん高度化していくと、やはりこういう形になっていきますから、余裕というか、そういう面がだんだんなくなってくる。技術先行になってしまつて心を鍛える間がない。だからいま僕らが指導者としてやらないといけないのは心技体と言われている、その心の部分の指導です。極端に言うたらけがでもそうです。よくテレビなんかで、このごろの相撲の選手でもけがが多いというのは、やはり戦術が高度化するから、それに走り過ぎて体が早く傷んでしまつ。野球選手でもそうです。余裕がだんだんなく

なつてしまつて、試合、試合、勝たないけない。そして勝つためには技術をこうしなきゃいけないという形です。

秦 プレッシュャーが大きいんですね。

田淵 さつき仲村先生がおっしゃったように、そういう方向へ、なにか専門化、高度化していつてる感じですよ。

僕は、これは日本の指導者にも問題があると思うんです。日本の指導者というのは常にトップレベルの、たとえば野球でもリトルリーグ等子供がやっている野球すべてプロのルール、いわゆる一流のルールでやつてしまつて、外国というのは年齢に指導者でも分けるんですね。フェンシングでも四歳から始めて、四歳から五歳まで、五歳から六歳、六歳から七歳と輪切りにして、その年代、年代の指導者の研修会をやるわけです。

子供の場合ですと、低学年の場合は一年かかって優勝戦をするんですよ。きょうは日曜日の朝九時から十時までを一回戦だけやりましょう。それも各ブロックでやつたり地区でやつています。次の日曜日は同じ時間一時間で二回戦をやりましょう。それをずつとやつて半年なり一年で決勝戦をやらばいい。と

ころが日本でしたら、朝早う五時から行って監督が呼んで、ユニホームに背番号つけてプロ顔負けみたいな格好して、また指導者もプロと同じような指導の仕方をやっていく。そういうところだけがもあるし、考え方も違ってくるし、子供の個性とか創造性とか、そういうものをつぶしているのは、指導者や僕は思うんです。

仲村 話がちょっと大きくなりますけど、日本人の国民性みたいなものもあるんじゃないかなという気がするんです。

日本のスポーツではやるのはだいたい、グレードが決まるもの、それからアチーブメント、たとえば何段、ハンデいくらかとか、要するに上昇志向。これが非常に多いんですよ。スポーツにおける業績主義というのでしょかね。

秦 差がつくスポーツなんですね。

仲村 そういう意味では同志社のスポーツマンはスポーツをもつと遊ばないかんと思つてますよ。

田淵 ゴルフがうちの先生のなかである、「おまえもつと遊べ」と仲村先生によく言われるんですよ。遊ばないかんと言われる

んですけれど、先生の遊ぶ楽しみと僕の遊ぶ楽しみとは違うんですよ。僕は自分がこれ以上ないというぐらいやって、そして試合のときにはぱっと成功したら、それは楽しいわいですよ。

この間、京都新聞に岡本綾子の記事が出ていましたが、最近の彼女は遊びを覚えていてということ、遊びというのを、一打一打に集中して自分の思うとおりにいったら、これはもう非常に楽しいという解釈がつけてありました。楽しさをそういうふうの説明してもらって、僕はいい記事やなと思って読んでんです。それをスポーツ面で見たので感動したんです。

仲村 遊びという言葉のもつニュアンスが問題で、仕事と遊びとか、まじめとふまじめといった場合、遊びはふまじめの範疇に属するといふふうに、なってしまうている。本当は遊びくらいまじめなものはないんですよ。だれに言われるまでもなしに自分が自主的、主体的に遊ぶんですから。その意味で、同社社のスポーツは、「スポーツは遊びである」ということにもっと徹していかないと強くならんと思うのです。

ところで川野先生。高体連の関係でいろいろ苦労なさっているようにお聞きしていますけれども、高校レベルの体育の指導といえますかお考えとか。

川野 日本人の指導者というのはまじめ過ぎる要素がものすごくあると思うんですね。だから新しい技術とか方法とかやり方とか、そういうものを、おれはこれを知ってるんだということ周りに見せびらかさないで選手がついてこない。最も基本的な動きとかいうのは昔もいまもたいして変わらないわけですが、基本的なことをやらせるそこまでの導入の仕方がちょっと変わってくるとか、同じことをやるのでも新しいことを言わないと、古いことをやっているという感覚を選手が持ってしまう。そうすると、あれはこういうような雰囲気かどのスポーツでもものすごくあるんじゃないかと思うんですね。

ですからその辺はもうちょっとわれわれも考えなきゃならないですし、昔、自分がやってきたころよりもいまのほうが、参考文献とか、そういうものははんらんし過ぎていて要素がありますね。そうするとなにか特効薬みたいなのがあって、丸薬一つ飲んだら急にガ

ツと強くなれるというような錯覚を選手も持ち、指導者もそういうような方法がなにかあるんじゃないかというような錯覚を持っている場合があるんじゃないかと思うんです。

けっしてそうじゃなくて、基本的には順番にやらなきゃならないことはあるわけですが、順番の土台を飛ばしちゃうってトップレベルの技術だけをまねしようとするから、けがしたり無理が出てくるわけです。ほとんどの体力ができてないのに技術だけを模倣しようとするから、そこに無理が出てくる要素があるんじゃないかと思うんです。

この間も京都の高校生の合宿で、そんな速効薬的に急に強くなるということは本来ないんや、トレーニングする場合にはいろんな原則がある。その原則をきっちり踏まえてやらなければいけないというようなことをミーティングの最初に話したんです。

また、ハードなトレーニングを最近の子供たちはあまり好まないわけですが、いまの選手は、なぜハードなトレーニングをしなきゃなんのかということを知識として持ってないんですよ。ハードなトレーニングをして適度な休養をとれば、もとのレベルより

もプラスアルファの回復がなされる。だからハードなトレーニングをしなきゃならないんだ。というような話をすると、そのときはわかってるんですけども、いざグラウンドに出してしまうと、きついなあという感じになってしまって、だれのためにトレーニングをしているのか、選手自身はもうひとつわからない状況が一般的にあるんじゃないか。

同志社のことを考えてみますと、同志社の学生というのはみんな頭がいいですし、賢いんですし、それとあわせて先ほどから出ている専門にどれだけ集中できるのか、あるいは幅広くといいますか同好会的な要素といいますか、一つのをやらせたらいいんでしょうけれども、もうひとつそこに没頭できない要素みたいなものが同志社の学生にはあるんじゃないかな。だからあそこまでやらんでもいいやろうというような気持ちを持っている場合が多いんじゃないかと思うんです。だから高校生なんかでしたら、たたけばたたくほど強くなるのはわかっていきますけれども、そこまではほとんどたき込まない。またそこまでやってしまうと、大学へ行ってから伸びない要素というのも出てくると思うんですよ。

ね。

“一貫教育”

仲村 それでどうですか、一貫教育ということがありますけれども、同志社の一貫教育が上がってくる人はだいたい高校時代と違つたスポーツをしたがるとか、スポーツをやつてきた人は文学をやるとか、私はそれはそれでいいんじゃないかなと思つていゝんですか。

ところが逆に先ほどから何度も申し上げている高度化志向からいきますと、せっかく高校であそこまでやってくれているし、たとえば中高大と一貫してそれこそ一つのスポーツを集中的にやってくれたら、もつといい、いいというのは強いといひますか、ちよつと言葉がむつかしいですけども、そういう選手ができるのになんという期待があることも、これまた事実なんですよ。

たとえ慶応がいつときラグビーでだんだん出てきて、うちが負けたときがありました。あのときに言われたことは、同志社はよそから強いを集めてきてやつとるけど。慶応を見てみると。あれ一貫教育で、十五人のうち

の慶応高校が何人ですか、あのときにとくにスポーツの分野における一貫教育を相当いゝるゝる意味で指摘されたことがありますけれど。

川野 先ほど田淵先生が生涯体育というか生涯スポーツというか、そういうような言葉を使われているんですけど、生涯スポーツに結びつける方法としてやり方は二つあると思ふんですよ。一つは徹底的にたいたいて、その結果強くなつて、なおかつやつていこうというのが一つのパターン。もう一つは、それをやるとまったく逆の場合というのが出てくるわけですね。あんなしんどい目するのやつたらもうやめとこうかいと。だから中学校のクラブでかなりしぼられ、高校へ入って同じクラブへ全部入部するかとつと、そうじゃないですね。中学校のときにやられた、あんなえらいこと、もうやめとこう、ほかのやろうかというのが半分あると思うんです。

秦 さつきから私、女子教育における体育というのは順番飛ばされたので不服に思つてたんです(笑)。ね、小屋敷先生。

仲村 いやいや、どうも。

秦 私ね、もし女子部のスクールスポーツ

というものがあるとしたら、歴史的にテニスなんてですね。いまだにテニス、先生方も生徒も一生懸命やっていますしね。記録によりますと、明治十三年にいわゆる府の密偵が調べきて、「ロウンティーンズと呼ばれる道具ありて」という報告書が出ているんです。私の知っている限りに於いて女子の学校でテニス、ロウンティーンズが——網を張ってゴム球を投ずると書いてありますから、たぶんロウンティニスだと思っんです。もしそうだとしたら、これは日本の学校テニスのなかで最初の記録なんです。軟庭連盟から出したテニス八十年史には収録されていませんけれども、日本の学校における最初の記載です。

それから後、さつき言った松浦政泰先生の女学校期報に、いまの栄光館の位置にウォータローとゲチスバグという二つのテニスコートがあって、そこでお日さんが暮れるまで先生も生徒も夢中になってテニスをやっていたという記事が残っています。ですから、もしいちばん古いスクールスポーツをと言われたら軟式庭球です。

先ほどから私、同志社で男の学校と女子の学校の違いで、どうしてそうだったのかと思

いますと、女子部に選手制度が発足したのは新制になってからです。といっていますのは、対外試合はだいたい日曜日組まれますね。戦前は日曜日が安息日でしたから、とくにキリスト教教育を熱心に行っている学校では出られなかったわけです。そういう意味であまりクラブ活動の選手制度を奨励していなかったということもあります。そのかわりに学校が体育行事に非常に熱心でした。初期のころは宣教師の若い女の先生が英語で号令をかけて、英語を聞きながら動くということが学習の一つでして、語学の教育を兼ねて非常に体育を熱心にやっておられた。新しい実験がされています。ですから選手が出なかったということが、必ずしもスポーツ、体育が盛んじゃなかったということじゃないんです。

ちょっと女子大の話をいたしますと、いま私がいへん自慢に思っていますことは、田辺の女子大の体育館です。私の知っている限り女子大だけの持ち物としての体育館は、あれは日本一です。ひょっとして東洋一かも知れません。そのかわり外の運動施設があまりないものですから、そういう意味でさつき田淵先生のおっしゃった各学校で共通の管理

ができるような、たとえばプールとか馬場とか、そういうようなものがあれば、小さい学校が一つ一つ無理してこしらえるよりも、全学的にとでも経済的だと思えます。

それからもう一つこの場所で申し上げたいんですけれども、女子部は学校ぐるみのレクリエーション活動が盛んでした。現在女子大では学校の行事としまして、サマーキャンプとウィンターキャンプがあります。それから修養会というのがあります。そのときいつも思うんですけれども、これだけの学校数を擁する同志社として、いわゆる野外教育施設があまりない。あっても非常に古いということですので、関学の千疋とは言わなくても、なにか全学が共通して使えるようなものをつくっていただけじゃないでしょうか。

女子大のもう一つの特徴は、セレクションがなく、いま十五ほど体育関係のクラブがあります。みんな好きで選んで入ってきますので、ある意味では気楽です。たとえば軟庭とかピンポンのように全日本優勝のところもありますけれども、大方成績にとらわれないで楽しくやっています。それでもだんだんメンバーが少なくなりました。しかしそ

のなかで養われるものは、女性の自立性とフレンドシップだそうす。これはけき学生に聞いてきました。

田淵 少なくなるのはどういうことですか、原因は。

秦 男の子がいないから。これはオフレコ(笑)。同大のテニ同とかゴルフが男の子との交際のチャンスにもなるから、そっちのほうに行くんでしょう、きっと。

田淵 よその大学とグループを組んで、それこそ冬になったらスキーに行き、テニスをやり、キャンプに行きという、そういうグループがいますね。

今村 ですから名前を聞いただけじゃ何をやるスポーツかわからないですね。

仲村 小屋敷先生どうですか。ついつい専門的な指導論とか技術論へ偏りがちですが、先生自身同志社の体育、スポーツについては、どのようなお考えでしょうか。

小屋敷 女優の長岡輝子さんのお父さん、長岡弘さんという方がいらっやって、明治の中ごろに北海道の根室で英語の教師になられたんですが、根室の町で明治の時代に、馬に乗って郊外を歩いたり、野球やボートを若

い生徒に教えたそうです。彼女の本のなかには、教えられた生徒たちがどこでそんなことを勉強したのかと聞くと、僕は同志社出身だからというんですね。同志社のスポーツというのが近代スポーツの一つの歴史のなかで大きな役割を果たし、いつときは光輝いていたんじゃないかということが僕なんかの知識でもよくわかるわけです。

それと、いま話に出ていましたような勝たなければいかんとか、学校の名誉とか、お国のためとか、そういう運動のあり方というのが別なところにあって、結局終戦でもって、日本のそれまでの一つの価値観みたいなものが変わったみたいに思われていますけれども、僕の子供のころでもまだ体育の先生は勝たなあかん言うてましたし、スパルタ式にやりましたし、おれは軍隊で鍛えられてきたんだなんて言うてね。結局スポーツ指導の面では、そういう戦前の要素みたいなものがずっと残ってきた。

一方では、高度経済成長で、ちよっと生活にゆとりが出てくるとテニスを楽しもうとか、ママさんバレーとか、少年野球とか、そういうものも出てきましたけれども、少年野

球は楽しもうとか、ママさんバレーは余暇の善用でいいとか、高校野球はこうだとか、きちんと分けられないでいろいろ絡み合って現在に至っている、大学のなかでも体育会のスポーツのあり方と同好会のあり方というのが起こってきているというのは、そういうことだと思えます。女子中高みたいなのところでいろいろスポーツの指導みたいなことをクラブを通じてやっています、そういうようないろいろ気になることがいっぱいあります。

たとえば、いま中学生や高校生は運動系のクラブの場合、先輩と後輩というのが厳然とありましてね。名前を呼ぶのに、たとえば田淵先生の名前をおかりしますと、後輩や下級生が上級生を呼ぶときに「田淵さん」と呼ばないんで、「田淵先輩」。本人がいなくても田淵先輩がこう言うたとか、こういう言い方をするわけです。それが最近つとに目立ってくる……。

秦 それはスポーツワールドです。小屋敷 そうでしょうね。一方では非常に上級生に対して従順なんです。教師より上級のほうに絶対的な存在で、教師がこう

せいと言っても生徒は知らん顔をしています
が、上級生が掃除しなきゃいけないとか、時
間守らなきゃいけないとかいうと、ハイ、ハ
イって言うことを聞くんです。何でもハイ、
ハイですね。その一方では自主性とかいうも
のがまるでなくて、言われなければね。ほん
とくはクラブの活動、運動のいろいろな練習
というのは、学校のクラブの時間じゃなくて
もできると思うんですね。そのほか実際の技
術的な面以外でしたら、ますますそういうこ
とはいろいろできると思うんですが、もう与
えられたことしかやらない、言われたことし
かやれないというようなことも出てきます
ね。

それから体育会と別に中学、高校の場合で
すと、教えるほうも素人なんです。その辺
の問題があって、これは問題というのは困っ
たことだという意味ではなくて、非常にいい
面もいっぱいあって、それこそその指導者の
人格がクラブに反映したり生徒に受け継がれ
ていったりするというような面もあると思っ
たんです。

それからもう一つ、同志社の学生、生徒と
いうのは非常に移り気だとさっき言ったんで

すけれども、先ほどから先生方のお話を伺っ
ていて、案外これは同志社のいい点かなと
(笑)。

確かに高校時代にクラブを一生懸命やった
生徒でころっと大学へ入って別なことをやっ
ている。確かに残念だという気はおわかりい
ただけだと思うんですが、見方を変えると、
またその子の別な意味の隠されていた個性を
発揮するということもあるわけですね。それ
が中学から高校という段階でも起こっている
んですね。だからそういう積極的な意味で変
わっていけば非常にいいと思うんですが、残
念ながらそうじゃなくて、めんどうだからと
か、いやだとか、消極的な感じで変わってい
くという面も見られるようです。

今村 先ほどからいろいろとご意見に共感
を覚えるところが多いんですけども、確か
に現在まだ管理されたスポーツという面が強
く残っているように思いますし、勝つことに
執着している面もまだ残っていると思うん
ですね。その点スポーツの考え方は、先ほどの
ご意見にもありましたように二通りあってい
いんじゃない。あるものをとことん突き詰め
て頂上に行き着くまでやってみようというの

も、一つの考え方でしょう。しかしある程度
までやったら、それはこれでよろしい。ほか
のこともいろいろやってみないと、これも私
また一つの考え方じゃないかと思うんです
よ。どちらがいい、どちらが悪い、間違っ
ている、正しいというものじゃないと思いま
す。

確かに現在の若い人たちを、たとえば面接
をしますときに生活の記録欄を見ていまし
て、高校のときにサッカーの選手だったと
か、いろいろありますね。「大学入ったらど
うだ続けてやるか」と言ったら、「いや、も
うサッカーは十分やりましたので、大学へ入
ったら何か違うことをやっていきたいと思
います」。こういうふうに見えるものが非常に
多いと思います。しかしこれ間違っている
とは言えないと思うんですね。それも一つ
のスポーツについての考え方だろうと。いま
は両方の考え方があっていいんじゃないか
と思います。

いずれにしても管理されているスポーツで
あるという点で、私も問題を抱えていると思
うんです。先ほど田淵先生が、いまの高校野
球はおもしろくない、監督の指示どおりにや

っているということをおっしゃっていましたが、まさにそうだと思うんです。同志社のスポーツはそれではいけない、同志社の設立の趣旨にもあるように、個性豊かな自治、自立の良心を手腕に運用する人物を養成するのが同志社教育の目的ですので、その点スポーツの面においてもこれに沿ったものでなければなりません。そのために選手一人一人各自の自主性が尊重され、また選手自身も自分はいまいった何をすべきなのか、どうすべきなのかということをお自分でしっかり考えて、それを自分の責任でちゃんと実行できるようなスポーツ、これが同志社のスポーツじゃないかと私は思っているわけです。

もしこれが実行されるならば、先ほどからおっしゃっています外国選手とのスケールの違い、これを少しでも縮めることができることができるのではないのでしょうか。古い殻から脱却してね。そういうふう同志社スポーツはあるべきだと、思想かもしれないけれども、私はそう思っているんです。

川野 おもしろさとか楽しさというのは、相手に勝つという一つの優越感がそこにはあるわけですね。それから勝つ以外に何が

あるのかというと、できなかったものができるようになったとか、あるいはまた記録がある程度短縮できたとか、そういうところにスポーツの魅力というものがあるわけです。

生涯スポーツというのはオーバーにいうと、自分の生命の危機をいかに脱皮するかというような、太り過ぎたからもうちよつとダイエットせんといかんとか、そういうものと競技スポーツが並列で最近出てきているわけです。

そういう流れは学校の教育のなかにも当然出てきているわけで、以前のように記録の短縮だとか勝つだとか、それだけがスポーツじゃないかってきている要素があると思うんです。

今村 いまおっしゃったように両方あると思うんです。日本ではまだまだ競技スポーツのほうに取り込まれる傾向がありますね。たとえば運動会で玉入れがありますでしょう。あれなんか私は完全に娛樂だと思っていましてたけれども、勝つために事前に集まって町内とかで練習するんですね。ゲートボールでもこのごろ勝つために、きちっとチームでそろって練習していますよ。だから日本もまだまだ

だそういう意味じゃ……。

秦 さつき今村先生がおっしゃいましたように、私、やっぱり同志社のスポーツマン、スポーツウーマンはすてきじゃなくちゃと思う、人間的にもね。プレーだけ上手で、あと暗いような人だったらいやですよ。ですから人間的に幅の広いチャームिंगなプレーヤーがどんどん出てほしいと思います。スポーツだけが取柄の人じゃ、同志社のスポーツマン、スポーツウーマンじゃないですよ。

“発展・飛躍を願って”

仲村 だんだん時間もなくなりましたがここで非常にむつかしいお願いですが、同志社と体育・スポーツ」という観点を含めて、なにかまとめたことをお話しただけで、うりがたいと思います。田淵先生からどうですか。

田淵 同志社スポーツについて最近オリピックをはじめ世界レベルで活躍する選手が少なくなりちょっと淋しいですね。大学スポーツはただ勝てばいい、強ければいいというだけのものではないのですがもう少し頑張っ

てほしいですね。

これは現代っ子の体質なんでしょうか、それとも教える側の指導に問題があるのか、最近の選手たちは、自分を鍛える工夫をしなくなっただけなんです。練習態度を観察していても、練習は練習、生活は生活と割り切っているんです。それはそれでいいのですが、僕の体験からは、これでは傑出した選手、チームにはなり得ないと思う。

このことは、スポーツに限ったことではないですが、大物を生む最小の条件は創造性と探究性でしょう。創意をこらし、工夫をこらし、自分で自分を造る気迫を失ったところには個性は育たない。僕たち監督やコーチはその個性を磨くアドバイザーにすぎないんですよ。

だから、特に同志社のスポーツ人にお願いたいことは、日常生活の中にも練習や鍛錬の工夫を取り入れ、スポーツする心、技術を磨くための独自の工夫と努力を重ねていただき、もっと高いレベルで活躍し、そして、秦先生のおっしゃる人間的に幅の広いチャレンジなスポーツマンになってほしいと思います。

仲村 川野先生いかがですか。

川野 一貫教育という面から見た場合、いままで同志社の体育人の集まりみたいなのをたまにやったことがあると思うんですが、中学校から高校から大学というせつかく一つのルートがあるわけですから、そういったなかでもちょっと自分たちはこういうことをやっているのやとか、あるいは逆に大学から高校に対して、おまえとこの高校もうちよつとこいうところ足らんと違つかとか、逆に高校から中学に言ったら、またそういう面もあると思うんですよ。

それからスポーツという点で考えてみた場合に、同志社の子供は非常に素直でやさしいというか正直なところが過ぎて、勝てるチームには異常に強いけれども、負けるチームにはやる前から、あそこには負けると思っただけで勝てないというふうな素直さというか、貪欲さに欠けるところがあるんですね。この辺は指導者の暗示的なものも、もっとも必要じゃないかなと思います。

仲村 同志社のスポールはもっと厳しくいこうということですね。それが足らんと。

川野 そういうことですね。

仲村 ありがとうございます。

小屋敷 ここでは話は出てませんでしたけれども、同志社に席を置く者としては、同志社のスポーツが新聞の紙面に出るといふか、活躍している姿を見たり接したりしますと、うれしいですわね。これは同窓生なんかとくにそういうことを感じているようなので、がんばってほしいと思います。

中高の立場として言わしていただきますと、中高の授業は別として、クラブ活動は特別教育活動の一環なんです。学校行事とか、そのほかの生徒会活動とかと同じで、そういうなかで人間教育といいますか生徒指導の一環として取り組まれているわけで、先ほど言いましたように、とくにスポーツに力を入れていて高校というのもありますけれども、そういうところはすぐれた指導者を呼んできて強化するというのをやっているようですが、同志社の場合は専門の先生もたくさんいらっしやいますけれども、ほとんど素人の先生がやっていらっしやるわけです。

そういうなかで大事な点というのは、勝つこと以前に、クラブという一つの集団のなかで生徒たちはいろいろ問題を起こしたり、悩んだり、苦しんだり、喜びを共感したりと

か、いろんなことをやるわけで、そういうものを指導者が見て、人間的な成長というか人格形成に導いていく。いろいろいじめみたいなこともあったりするわけですが、そういうことを指導していくという点がたいへん関わっているわけなんです。同志社は先ほど言ったように特定のスポーツに力を入れていませんので、そういった面では、先生方はこんな人間教育の一つとしてクラブをとらえて指導されているんじゃないか、こういうふうに思っています。

先ほど言いましたように一つのクラブで三年間なり活躍して、ある程度一つの個性を伸ばした。また別なところで別な個性もさらにみがかくと、こういうようなことが行われていけば、中高の課外活動としての同志社のスポーツのあり方というものも追求されるんじゃないかと考えます。

仲村 高橋さん発言の機会が少なくて済みませんでした。

高橋 いやいや、勉強になります。

まとめにはなりませんけれども、同志社のスポーツはプロ集団もしくはプロ養成集団ではないというのが僕なりの理解なのです。し

かしだから勝たなくてもよいとか、適当な、たとえば関西の一部リーグで毎回二位、三位についていればそれでこと足れりということではぜんぜんないわけで、やっぱりやる以上は勝ったほうがいいので、勝てる基盤はいっぱいあると思うんです。

だけど、そのためには、運用する点で非常に問題はあると思うんです。さつき僕が言いましたように、素人とオリンピックを目指す力量を備えた者が一緒に、技術的に運用はむつかしいと思うんですが、あえてそれを実験してくれるのが同志社のスポーツ、こういうふうに通じていますので、それは非常にニューズバリューがいまあるなと自分では思っているんです。しかしむつかしいからみんなやらない。

たとえばテニスというと、きょう初めてラケットを持つ人と中学、高校とずっと超エリートできた子が、自主的に牽引力になる学生たちと一緒にって日常生活を過ごせるというふうなモデルを大学でつくってほしいなというのが願いです。

仲村 では秦先生、締めくくりにひとこと。

秦 私は同志社のスポーツマンもしくはスポーツウーマンは、ほんとうに純粋で理想家であってほしいと、それだけです。

仲村 皆さん、ありがとうございます。

正直いまして「同志社の体育・スポーツ」となると、時報の読者の人々は、もっと華やかな紙面を期待されるかもしれませんが、今日は問題点の指摘といえますか、反省的な御発言が多かったように思います。これを同志社体育・スポーツの次の発展、飛躍のためのばねとして、関係者一同で努力したいと思えます。

（一九八七年七月三十一日収録、於有終館担当理事室）

文化としてのスポーツ

倉 敷 千 稔

はじめに

八五年一二月、社会学科の忘年会が雪の貴船で催され、飲む程に、酔う程に、誰かの発案で、「六甲おろし」を唄うことになった。即座に半数以上が参加、リーダーのもと、腕を振って、高らかに合唱された。ファンの心理は時代感覚に左右されるものである。あの年のタイガースファイバーは現代感覚を象徴するスポーツの光景であった。日頃、主義主張を異にする先生方を、座興とはいえ、これ程までにファイバーさすとは、なにが先生方をあそこまでかりたてたのであろうか。

スポーツには人の心をゆさぶる特性がある。それはプレーヤーだけでなく、ファンにも、指導者や管理運営等に当たるものにも、強弱の差はあれ共通のものである。最近になって、この心理をつくり出す仕掛人は脳下垂体で化合されるβ-エンドルフィンという快感物質であることが判った。快感物質が、プレーヤーも、指導者もフ

ァンも、スポーツによってハイ現象へ誘うのである。

一方、スポーツはその大学の文化レベルを現わすものでもある。言うまでもないことであるが、同志社の志向する思想はデモクラシーを基調とした、自由、平等のもとに、自主性を尊重していこうとするものである。その定着度を図る上でスポーツも例外ではない。むしろ、兎角特別視されがちなスポーツにこそその真価が問われるのではなからうか。

同志社のスポーツ施設は、大学の田辺移転に伴ってほぼ完備した。この時に当たり、スポーツの特性にふれると共に、スポーツの特性が同志社という環境でいかに生かされるべきかについて考えてみたい。

スポーツとエンドルフィン

なぜ、われわれはスポーツをするのだろうか。また観るのだろうか。それはスポーツ刺激によって引き起こされるハイ現象の体験

が、われわれをまたスポーツへとかりたてるようである。ハイ現象というのは、われわれがスポーツを行った時、程度の差こそあれ爽快感になる、その状態のことである。最近、ランナーズ・ハイなどという言葉に見られる如く、運動の強度、持続時間、頻度等の条件がうまく合えば、気分が快になり、やがて陶醉状態に入るとされている。もともと人間は行動の選択に当っては、快の方向を優先するものようである。快は生存とのかかわりが深い現象で、種の保存のためや食欲を満たす行動を引き起こす。それが適応という機能で、人間が進化の過程で身につけた生きるための機能である。スポーツも快感を求める適応の一方方法であり、世の中が軋しめば軋しむ程スポーツに対する関心が高まるのもうなづけることである。また、このハイ現象はスポーツ刺激によってだけ起こる生理現象ではなく、講演や会話等でもしばしば起こり、これらをトーキング・ハイと呼ぶ人もいる。それがスポーツで特に話題になるのは、毎日同様な運動刺激を繰り返しているうちに、遂に中毒性をもつようになるからである。

スポーツには技術の上達という興味もあるが、なぜ、ここえきてハイ現象が注目されるようになったのであろうか。その背景には、脳科学の研究成果が脳内神経過程と心との関係を明らかにしつつあること、併せて、六〇年代から始った知的世界の地殻変動の中で、既成文化が見直され、人間についての捉え方にも大きな変革が余蘊なくされたこと等がある。それによって、従来、アンダーグラウンドなものとされてきた情動・本能レベルの心が、人間の行動を支配しているのではないかと考えられるようになり、市民権を与えられ

ることになった。心とからだについても二元的な考え方に疑問がもたれ、メルロ・ポンティの身体論等がクローズアップされてきた。さらに、心の問題については、人間にかかわる全ての学問の研究成果を総合的に纏めた理論の出現が求められている。

さて、このハイ現象を作り出す脳内物質は内因性オピオイドペプチドに属するβ-エンドルフィンという神経伝達物質で、遺伝子DNAの中に組み込まれている。β-エンドルフィンにはモルヒネの3.5〜5.8倍の麻薬治性をもつ報酬系のホルモンで、交感神経の緊張状態が続いた後、抑制作用として拮抗的に副交感神経・迷走神経系で合成され、脳内活動を盛んにする。この脳内の活発な活動が生存を力強くすることはいうまでもない。ここでスポーツが特に取り上げられるのは、脳細胞と足の抗重力筋である緊張筋が一種の運命共同体の關係にあり、スポーツをすることによって、脳の生命維持作用をより一層活性化するからである。

この研究はモルヒネ、大麻等、痛みを柔げる麻薬受容体が、脳の機構の中にあるのではないかという発想から始った。七五年、世界各国の数グループから発見の報告がなされたが、その名譽はスコットランド、アバーディーン大学のJ・ヒュージに与えられた。さらに驚くことは、最近の研究から、β-エンドルフィンには学習や記憶に関連しており、人間の心理現象を左右する重要なキーであることが明らかにされたことである。それについて思うことは、人を含む全ての生物が学習と記憶活動を行なうのは、欲望からの動機と嫌悪からの動機の二つの動機づけからである。嫌悪からの動機は否定的であり、欲望からの動機に比べると効率が悪い。しかも、それらの

行動の動機づけと β エンドルフィンの分泌量とは比例しているといわれている。このことは今後、教育を含めた指導面で、やる側の動機が効果を決定づける重要な要素であることを示唆している。何事も好きにすることが先決であり、好きだから熱中もし、上達もするのである。

また、有名な研究者の中には、肉体的消耗の激しいトライアスロン中、 β エンドルフィン血中値が平常値の五倍以上に上昇するところから、競技中に苦痛に対する感受性が鈍くなり、過酷なレースに耐えられるようになるのではないかとし、さらに精神統一や集中力の訓練次第では、競技力の大幅アップも夢でないとしている。

ファンの場合もプレーヤー同様、声援が快い興奮をかりたてるものと推測される。タイガースファイバーはその典型であり、声援がプレーヤーの好プレーを生み、好プレーがファンを興奮さす。応援団のウエイブ等も快感から起るパフォーマンスであり、その背後には β エンドルフィンの活発な作動があるのである。

今後は心の構造の解明に生化学の分野がより一層大きな役割を占めることになる。その意味からも、 β エンドルフィンはいんターフェロンと共に、この二〇年間、生化学の分野で最も注目された二大物質であったが、さらに、今後も話題を生むことになりそうである。

なお、宗教におけるエクスタシーも β エンドルフィンによる生理現象から起るものと考えられる。M・エリアーデのシャーマニズムやゴラクナータが体系化したハタ・ヨーガにもうかがうことができ、ユタ、チベット密教、ヴァドゥー教にもある。また、リオ

のカーニバルの陶酔もこの類で、これらの関連が明らかにされる日も近いだろう。

同志社スポーツに求めるもの

大学の存在価値は、その大学の志向する思想がどれだけ機能しているかによって決まる。同志社には同志社独自の思想がある筈である。あえて、ここで同志社の志向する思想などとりだしたのは、スポーツ界は特別な世界とされ、一般的には保守的で判りにくい集団とされている。同志社スポーツだけが例外であるといいたい切れない。同志社の価値レベルは、そこに所属するもの全てによってつくられるのである。もつとも、大学の志向する思想と実体との間には裏腹なことが多く、その存在すら疑わしいことではあるが……。この思想は少くとも社会適応の条件として、生活に必要なことであることだけは確かである。スポーツには様々な集団があつてよいだろう。しかし、同志社という環境でスポーツをするものにはそのことを期待したい。選手だけでなく、スポーツに捉る指導者や管理運営者、ファンについても同様である。新しい出発の機会に真剣に考えてみるべき問題ではなからうか。

最近、大学でもスポーツ選手の環境適応の欠除が指摘されることが多い。ことに少年スポーツから育つた選手に多いとされている。その原因は、個人種目、チーム種目にかかわらず、全ての行動を組織ぐるみで行なう風潮が強くなり、そのため自主的な活動が減り、主体性が身につけにくくなった点にある。これらは指導上の問題であり、指導者は自分の指導理念が選手の生涯にわたる適応能力に大き

な影響を与えることを自覚せねばならない。特に、少年スポーツの指導者には勝利至上主義者が多く、勝つための技術アップにパターン化した練習を強要する。人は誰でも他人から承認されたい欲求をもっている。そのことが指導者に勝利を優先させ、選手もまた指導者に承認されたい欲求から、指導者の言うことに忠実になろうとする、その結果自主的判断に欠けることになるのではなからうか。自分で行動の選択をする前に全ての方向が決ってしまっている、そのことが子供の創意工夫の芽を摘みとることになる。少年スポーツの年代は自学習自習、つまりセルフ・コントロール、セルフ・エドケーションの習得に最も大切な時期である。パターン化した練習がパターン化した思考様式を生み、主体性の確立とはおよそかけ離れた方向へ進んでいるものと考えられる。この思考様式から主体性を取り戻すには相当強い自己改革が必要とならう。この状況を大学のスポーツにまで引きつづけてきているのではなからうか。ましてや全員がかけ声をかけ合いながら、四列縦隊で走るような練習からは、主体性の回復は望めまい。主体性は自主性を尊重した自由な環境から育つものである。これらの人達は、全く自由な環境におかれたら、自分でなにをしたらよいかわからなくなり、なにもできないのではなからうか。もっと選手の自由選択に任ずる練習はできないものであらうか。

たしかに、スポーツで勝つことは一つの価値である。しかし、勝つことが価値として認められるためにはその基盤に、評価に応えられない思想がなければならぬ。そこにいたって始めてスポーツが文化といえるのである。

また、勝利至上主義から、選手の無知につけこんだ指導者の示唆が不幸を招いた例は数知れない。八五年、西ドイツでは、六八〜七八年の間に金メダリスト一人を含むオリンピック選手の若年死亡者が約五〇人に達したことを発表した。発表はされなかったが、ソ聯や東欧諸国のように、オリンピックのメダルがその後の生活に大きく影響するような仕組みの社会では、その犠牲者は測り知れない数であろう。死を早めた原因は、筋肉増強剤等、生理的効果のあるホルモン剤の投与による一時的な筋力強化や、精神興奮剤の使用にあると考えられる。勝つことが優先するとメダルと人間の命の重ささえわからなくなってしまうものだろうか。これらは全て、選手が適応能力、即ち選択の能力をもたなかったことから起った悲劇である。

前述のエンドルフィンも、末期癌患者の疼痛の治癒や、無痛分娩に利用するため製品化されるのはそう遠くないだろう。これらがマラソンやトライアスロン等の記録向上のために使われたいとは限らない。指導者は時にはいい方がよい場合もあり、今こそ、指導者の資質が一層問われる時である。

さらに、管理運営面ではスポーツ施設がスポーツ人口に比例して作られていないところから、同志社の思想がより重要な意味を持つ。スポーツを希望するものには、体育会、同好会、サークル等の外に、組織に入らないものも相当数いる筈である。現状からは、これらに十分な場所を提供することは困難が予測されるが、一人や二人でもスポーツのやれる環境づくりが必要である。組織に入らないものは、ジョギングをやれ、ということにならないように配慮すべきである。管理運営面でスポーツにかかわることには苦勞も多い

が、ロマンの最も生かせる部門でもある。

なお、今一つスポーツにはファンという層がある。われわれ同志社に所属するものは、全て同志社スポーツのファンでもある。オールドファンの間でよく話題になるのは、相撲の石田、日比野、森田、山口ら、野球の小野、伊香、安藤、太田ら、バレーボールの小山、吉田らの練習のことである。野球以外は指導者のいない自主練習であったが、彼らの練習に共通していたのは、はりつめた緊張感の中に殺気を感じるほどの凄じさがあったことである。ファンは選手が気力の限界に挑戦する真剣な雰囲気魅せられて熱中するのである。そして、ファンは一つの感動をも生涯忘れることはない。選手とファンはこうした関係にあるのではなからうか。

おわりに

スポーツは好きだからするものである。好きだから熱中もし、苦しみにも耐えて付加価値も生まれるのである。秩序だっていて一見よいように思えても、画一的なところからは新しいものは生まれてこない。創意は渾沌として見るように見える自由な環境から育つものである。主体性、独自性もまた、得てして渾沌の中にある。

今、同志社では国際交流が大きな課題になっている。スポーツが国際交流の舞台で活躍するためには、評価に値する思想の上に、スポーツの特性が生かされることが肝心である。それが可能になった時、始めて田辺移転の意義も開花することになるだろう。

(大学文学部教授)

新島襄の色紙および掛軸(影本)を頒布



同志社の創立者
新島襄の書簡・色
紙の遺墨をそれぞ
れ三点作成し頒布
することとしまし
た。

◎掛軸(影本)

一幅 八〇〇〇円(送料三五〇円)

(1)「男子決志馳千里 自嘗苦辛豈思家 却笑春風吹雨夜 枕頭尚夢故園花」

(2)「不止月下併能越 跋渉八洲是我分 壯図却促男兒涙 滴々灑為縷々文」

(3)「いしかねも透れかして一筋に 射矢にこむる」

◎色紙(影本)

一葉 一〇〇〇円(送料一七〇円)

(1)「時危思偉人」

(2)「不止月下併能越 跋渉八洲是我分 壯図却促男兒涙 滴々灑為縷々文」

(3)「送歳休悲病羸身 鷄鳴早巳報佳辰 劣才縦乏済民策 尚抱壯図迎此春」

- ◎ 購入ご希望の方は左記へ直接電話または葉書でお申し込み下さい。
- ◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから後日ご送金下さい。
- ◎ なお掛軸は製作日数の関係で、納品が一カ月遅れる場合があります。

同志社 収益事業課
京都市上京区今出川通烏丸東入る
Tel 〇七五(二五二)三〇三七・八

女子学生のスポーツ意識

野 崎 康 明

近年、サークルと呼ばれるスポーツ同好会が、どの大学でも盛んになって来ている。サークルに所属している学生は、体育会運動部の所属者を遙かに上回っている。

早稲田大学では公認未公認を合わせて、スポーツ系同好会は一五団体があると報告されている。同志社大学でもスポーツ系サークルと称する任意団体は一〇九団体あり、所属学生の人数は四〇〇〇人を越えると言っている。

これらのサークルはどの大学でも特に女子に関しては入会を歓迎しており、かなりの数の他大生が含まれているサークルが多いと言われている。

本学では、同好会は全て認可方式をとっており、一定の年限が来れば、クラブに昇格するという方式がとられている。その為同じ種目の同好会は作ることができない。また女子大ということもあってか、学内にはサークルと呼ばれるような活動はほとんど存在せず、もっぱら他大のサークルへ所属するという傾向にあるようであ

る。

これらの煽りを受けてか、本学の体育会クラブは入部人数が少ない。特に本学のようにスポーツ推薦入試等の実施をしていない大学では、クラブ活動を強いチームを作ってPRするということもできず、クラブによっては練習試合をする人数にも満たないといった有様である。

何故このような状態があるのかと思い、サークルなるものの実態を少し調査すると同時に、本学生のサークル所属の実態も調査してみた。本学の一、二年生二二五名を対象に、体育会、文化系クラブ、同好会、一般サークルを含む何にかに所属していると答えた者は、一五二名で全体の六七・六％であった。その中でスポーツ系のサークルに所属している者は、一一七名で全体の五二％であった。実に学生の半数以上の者がスポーツ系サークルに所属していたのである。

一方本学学生の大学公認クラブ所属はと見ると、現在文化部、体

育会合わせて全学生数三九二一名中七七〇名で全体の二二%である。

これを多いと見るか少ないと見るかは別にして、そのうちの体育会クラブに所属している者は、一九六名で全体の五%である。

サークルの調査では学生の六七・六%がなんらかのサークルに所属していると言っているが本学の公認クラブには二二%のみで残りは他大学のサークルに所属していることになる。しかも調査では、五二%がスポーツ系サークルに所属となっているが体育クラブには五%の学生しか所属してはず残りは他大学のサークルに所属していることになる。

どうも文化系クラブよりも体育会クラブのほうが一般学生にはより敬遠されているといえる。この辺りに本学学生の近年のスポーツに対する意識の傾向が見えるように思われる。

すなわちスポーツに対して興味は持っているが、体育会のようなところに所属してコーチや先輩達から指示され、その意見に従って汗水たらして練習して、大学の名のもとに大会へ出て勝利するのをその目標とするというのは現代女子学生は敬遠するのである。

スポーツは楽しむためのものであり生活のアクセサリとしてたしなむ程度に行うといった傾向のようである。通学にはテニスラケットを抱えて歩くのがファッションであり、冬はスキーウェアで歩くのが当世風でナワイのである。

また夏は仲間達と高原のペンションでテニスを楽しむか、海辺でウィンドサーフィン、かサーフィンを楽しむ、冬は仲間と連れ立ってスキーを楽しむ、夜はパーティーを楽しむ、この様にスポーツを

楽しみ、生活をエンジョイするのが現代女子大生のスポーツ感のようである。

汗水たらして身体を鍛え、練習に練習を重ね勝利の日を夢見ている体育会クラブは、暗いイメージを持つものであり、彼女らに言わせればダサイのである。おしやれでないのである。もっとも全ての体育会クラブがそのように思われているのではなく、マスコミを賑わすような花形クラブの場合には別で、男子のクラブ入部希望者も多く、女子大生はクラブのマネージャー希望者が多いと聞く。しかしほとんどの体育会クラブは目を向けられていないようである。

これらの風潮をただ軽薄というのは簡単である。しかし彼女らの生き方の中にもうなずけるものがある。辛い練習ばかりで、たまにしか日の目が見れなかった運動部経験を持つ者にとっては、楽しく自由に伸び伸びとそして生き生きとスポーツを楽しんでいる彼女らを見ると、実に羨ましい限りである。

スポーツは本来楽しみから生れたのであるがこの日本のスポーツ界はそれを、先ず苦しめ、そうすればやがて楽しいこともあるからという練習至上主義のシステムをいつしか作りあげてきた。またここでは上下関係が重んぜられ、コーチ、先輩の言葉には絶対服従するといったシステムも定着してしまっただけである。

現代の若者はそれらを、体育会というクラブ組織を拒否すること一旦否定し、自分達で純粹に楽しむためのサークルを作りあげていったともいえよう。

面白いことにはこのサークルというものも、それぞれ年を経るにつれて、サークル同志の横の連絡ができ、大会を始めているのであ

る。関西地区、関東地区の大会に止まらず全国規模の大会もいくつ
かある。

そこではそれぞれの大学が自分の大学の旗のもとに戦ってもいる
のである。まんなら母校愛が無いでもない。ただ少し違うのは、
各クラブは〇〇大学テニスクラブというのではなくいろいろな個有
名詞をつけているのである。この辺もただ大学の名誉のみでぶつか
るのとは少し異った風景である。

サークルのもつ次なる特徴はスポーツ種目についてである。同じ
種目のサークルがいくつも並列して存在していることである。特に
近頃流行の硬式テニスは各大学とも二〇サークル以上あり、同志社
大学でも現在四〇サークル程ある。これまでの我々の頭の中にある
一種目一団体という固定概念は無いようである。

そしてこれらの同種目のサークルはいろいろ特徴づけられてお
り、少しは厳しく指導されるサークルからかなり厳しい指導で技術
の習得と大会で勝つことを目標にしたサークルもある。またコンパ
やメンバー間の交流が中心で練習は少ないところもかなりある。そ
れぞれのサークルが自サークルのセールスポイントを決めており、
学生達も自分に合ったサークルを見つけているようである。

テニスサークルに次いで各大学で人気のあるのは複合スポーツ系
のサークルである。このサークルでは実施するスポーツ種目を一種
目に限定せず複数種目にわたって行うのである。あらかじめ実施す
る種目を決めて実施しているところや、シーズン制にして春、秋、
テニス、夏ウィンドサーフィン、冬スキーと言った様に行っている
ところもある。またメンバーの希望に応じて、各種スポーツを順次行

っていくところもある。このように一種目に拘らない点もサークル
活動の特徴のようである。この様なサークルの実態を見るにつけ現
代の学生がいかにスポーツを楽しみ、上手に利用しているかがわか
る。

サークル所属学生のスポーツ技術レベルはどの程度のものなのか
と少し調べてみたが、このレベルの幅が非常に広いことに驚かされ
た。一度も種目を行ったこと無しで入ってくる者もいるが、中には
インターハイ経験者や野球の甲子園大会出場者までおり、高校時代
のクラブ経験者が多いのである。

女子大でも他大学や同志社大学のサークルに入っている学生の方
が技術レベルの高い者がかんりいる現状である。故にサークルは必
ずしも技術が体育会の下に位置するとはいえない。そのような時代
になると、もつあんな苦しい練習は結構です、これからはスポーツ
を楽しみたいという答えがよく返ってくるのである。

スポーツを楽しむものとして考えている点はなるほどと思う一方
で、何にか人生の盛りを過ぎた人の話を聞いているようにも思えて
くるのである。この辺りにも現在の若者のスポーツ感が表われてい
る様に思える。

一方体育会クラブも以前と比べて、かなり様変わりして来ているよ
うに思う。かつてのように上意下達で下級生はただ従っていく、と
いった風潮や世にいうしごきといった光景は、ほとんどの大学で見
られなくなってきた。

本学は私の来た一九七三年には古い体育クラブの傾向は見られ

ず、学生一人一人が尊重され、自由な雰囲気の中にスポーツを楽しむんでいる空気があった。その後いろいろな変化してきている。

先ず練習時間が少なくなってきた。特に全員かならず出る練習日は週二日のクラブが多く他の日は自主参加か無しといったところが多くなって来た。我々の時代はクラブというものは毎日練習するのが当然で、休みは週一回あれば良い方であった。

先輩後輩の関係も、友達付き合いのようで、非常に緩やかになってきている。これらの点を見ると、練習時間や内容においては殆どサークルと変わりはないように思うのであるが、それでも学生の多数はサークルへと流れて行くのである。否同志社に限らず全国の大学でこのような傾向にあるようである。

このような学生達の傾向の中でこれからの学生スポーツ活動の在り方はいかにあれば良いかと悩んでいるのは私一人ではないと思う。この傾向の、一つの理由はスポーツの専門種目があまりに下まで降りたため、小学生からある種目についてのみ行うようになり、また中学、高校とただ勝利を目指してのハード・トレーニングに終始したため、スポーツを十分楽しんでないので、自分の意志を生かせる大学では楽しむだけのサークルへと流れてしまうのではないかと考えられる。

もう少し小学生、中学生の段階でスポーツを楽しむ心を指導してもらい高校、大学で専門的に練習して行くようになれないものかと思う。スポーツの楽しさを知ると更に楽しいものにしようという意欲も起り、技術習得へ意欲も増し上を望む気持ちも出てくる。しかし現在の小・中学校、特に中・高等学校の指導ではなかなかそのよう

なことは望めない。

そこで私が顧問になっているクラブでは、一年生は徹底的に楽しませる。一年生と言わず四年生まで先ずスポーツを楽しむ事を中心に指導するようにしている。次には楽しむ為はどうするかという点で考えていく。

スキー部なのでスキーの楽しさを十分知るところから始める。初歩の技術でもその段階で徹底的に楽しむ方法をとるようにしている。もっと技術が上達し、より上級の技術を習得すれば楽しさも増す。そこでこの技術を習得する練習をするのだということを、一人一人に納得させてから始めるようにしている。

このようにすると学生達は不思議なもので、積極的になり技術向上に意欲的になって来る。楽しみを求めていながら三回生ぐらいになるともう必死になって来るのである。そしてまたスキーの楽しさも十分味わっている。このような姿勢こそスポーツ本来の姿であると思う。

このようなスポーツに対する態度は同志社のスポーツ史を見るとそこそこに見られる。そういう点で私のスポーツに対する考えは、同志社では歴史的に行われて来ており特に新しいものではないようである。しかしこのようにクラブの学生が生き生きとしてその楽しさを語る時かなり新入生の参加には影響しているようである。ここ十年程スキー部は毎年数名の入部者があり体育会ではトップクラスのクラブ員を確保している。しかしこの人数もサークル参加者に比べれば多いとは言えない。

現在は時の流れで体育会クラブが一時的にその人数や人気の点で

落ちていると思われるが、各クラブがスポーツを楽しむことを中心に考え、その上で技術の習得や勝利への意欲を持っていくことをし
ていき、同じ志を持つ仲間として集り、楽しみ、探究して行く気持
を失わない限り、必ずやまた多くの学生達が入ってくるようになる
と思う。

しかし一方サークルの持つ良さを研究し体育会でも取り入れ可能
な部分は取り入れていくことも必要である。また現在の体育会のク
ラブ制度そのものを抜本的に見なおし、一種目一団体に限らず、チ

扉の新島襄書簡について

昭和六十年秋、新島襄の遺墨「清心者福矣」をご寄贈下さった同
窓会名誉会長の武間富貴氏から（本誌、第八十号参照）、この度、
またもや扉に掲げた新島書簡（軸装）をご恵贈いただいた。深甚の
謝意を表する次第である。

初めて公開されるこの書簡の宛名は、鈴木清である。鈴木は武間
名誉会長の母堂の嫡父、つまり、武間氏の母方の祖父に当る。

三田藩士であった鈴木は、明治維新後、神戸で事業を興すことも
に、D・C・グリーンから洗礼を受け、神戸教会の設立や神戸女学
院の開設に尽力された。だから新島とは早くかく面識があったはず
である。

〔前略〕過日民友社之青年志人熊本ニ帰省之路次、神戸教会之重
たる人ニ拜晤を得而、教会之御様子等御尋申度と被申候間、貴兄迄
差上候次第ニ御座候。切御申仰通小生調印仕候郵送申上候間、御落
手可被下候。右者貴答迄、艸々頓首」

キャンピオンシップを目指すクラブだけでなく、楽しむスポーツを目
指すクラブや複合スポーツのクラブを考えたたりする柔軟な体育会組
織を考え、それらの中で秀れた学生を集めて大会に出場するよう
な方法も面白いと思う。これまでの固定概念に捕われることなく、新
しい方法でこれからの大学スポーツを考えていく必要性が、このサ
ークル活動盛んな現代に求められてきているように思われる。

（女子大学教授）

十月二十二日の日付はあるが、封筒を欠いているので、何年かは
不確かだが、民友社が設立されて『国民之友』が創刊されたのは、
明治二十年二月だから、それ以前ではあるまい。

新島は、明治二十一年十月には東京におり、十月二十四日に神戸
へ船で帰着しているのだから、この年ではなからう。翌二十二年十
月は、十二日に神戸で乗船して東上している。だからこの年でもな
くて、明治二十年十月二十二日付の書簡とみてよさそうに思われる。
「尚々小生も近々神戸に移り、休養可仕積ニ候間、乍序此段申上
候」と追而書きにある。

明治二十年はひと夏、新島は札幌で静養したのであったが、健康
はなおすぐれなかったところへ、A・ハーディーの死去で、精神的
にも強い打撃を受けていた。休養しなかったにちがいないが、彼が
神戸の諏訪山へ休養に赴いたのは、翌二十一年十二月十二日であっ
た。この年の夏、新島の健康状態は最悪の事態を覚悟している必要
があると、八重夫人は東京の医師たちから言い渡されていた。

中学・高等学校の体育指導について

池田 陸 男

はじめに

体育が嫌いな生徒が増えています。スポーツをする事は好きだが体育の授業は嫌いというタイプもあります。そして、まるっきり体育が嫌いである理由として体育教師を嫌悪している生徒達があります。なぜそんなに嫌われるのでしょうか。多くの点で自分なりに思ひあたることもありますから、中学生を対象としています非常に狭い範囲での経験からこの事に触れてみようと思います。

名は体をあらわす

かつて体育はどのような理由で学科としてとりあげられ、また何と呼ばれていたのか、とこの点をふりかえってみますと明治以来、色々と多くの歴史を持っています。呼び名も「体育」「体術」「体練」「体科」そして「体育」と呼ばれ「保健体育科」となります。「体術」はつまり術を教えるのでありまして、内容としては、ひたすら兵式体操であり隊列運動です。男子に軍隊式体操への期待が大きく、ひ

たすら「従順」「友情」「威儀」の軍人三精神を兼ねそなえた「善良の市民」を養成することを旨としました。そして随意科目であったものが必須科目となり、名称も「教練」となり、撃剣と柔術が内容の主だったものでありました。昭和に入って「体練科」では指導者として直接軍人が学校に入ってきた。そしてひたすら戦技を課すものとしての教科となりました。あきらかにかつての体育は国の期待、軍のねらい、国防への力として利用され続きました。指導方法はもちろん、集団の力を育てることが第一であり、集団訓練、号令、命令、絶対服従でありました。

さて戦後の体育はどうかというと呼び名は「体育」となり、「教育の目標」は体を育てることが、体力をつけることが強く要求されました。これは戦後の国民、児童・生徒の体力、体格向上が大切として意識づけられました。学校教育はこの目標には大変協力的であり、カリキュラムも体を鍛える、体格向上へ方向を強くすすむこととなります。しかしこの戦後の体育が戦前における体育、あるいは

明治時代の初期体育への期待や思わくが完全にとりはらわれていたのかと、それはきわめて危険で安易な判断と思えます。むしろ戦後の体育には古い時代の期待や思わくは、深い底に脈々と生きていたのではないかと思えます。しかしさしあたり「体育」のねらいは「体力づくり」であり、忍耐力や友情、社会性を育てるものです。

体育がらみが育つ

さて、はじめにで書きました、最初の課題であります「体育嫌い」はこの辺から、つまり、体力づくり教育が強調される頃から生まれているように思います。指導者が熱心である程、体力向上のめざましい生徒が増え体を動かすことに興味を示すようになる、一方、効果があまりあがらないとか、記録や結果に劣等感を持ち、そのうち次第に興味を失なう生徒が出てきました。さらに、もともと体を動かすことの好きでない生徒、汗をかくことを嫌う生徒達があります。が、しかし本来、体を動かすことは好きなのにもかかわらず体育教師が大嫌い、だから体育が嫌いという生徒達が多いのは認めざるを得ません。この最後の理由は、今、社会的にも学校教育のあり方を問われている点にむすびついたものと考えます。

中学生になった。やがて自主性が芽ばえ事の良し悪しの判断が備わり自分も他人も客観的に観察することをはじめると、多くの体育教師の指導態度、学習内容に疑問を持つようにもなります。体力づくりがあまりにも強迫的であり、競争的であって、学習そのものもスポーツクラブ生徒達の活躍に終り、評価も目立つプレイをするも

のが良くて、おとなしく、あまりプレイが上手でない生徒はほとんど声もかけてもらえずに終ってしまう。マスメームのような発表したり、統一された形を表現する教材などでは、同じ隊形や同じ姿勢の体操を何回となくくりかえし、強要される。動きが弱かったり、遅れたり、ずれると厳しくしかられる、そんな経験をした生徒達は確実に体育嫌いになってしまいます。

学校内での立場や役割について

多くの行事がある中で、体育祭、遠足、アッセンブリーなどでは生徒をまとめ、整列させる役が必要ですが多く体育教員がこの役に適しているらしく、今までに、ずいぶん経験しました。普通、生徒達は集まると会話をし、頭を動かさざわつくのですがある程度の状況を保たないと進行出来ないのです。そこで生徒指揮係が生きてくるのです。大きな声、号令のかけ方のうまさ、時には厳しくしかる。まさに適役です。生徒達は静かになり、不動となります。しかしこれは生徒が心から静かな姿勢をつくり出すようになったとは違います。なぜなら力で押さえることが出来てもそれは一時的です。静かさを保つとか他人の話をきくというものは本質的に人間的な成長を必要とします。従って、柔和な、もの静かな先生達の指導があっても素直にきかないし、無視をすることもあります。そういうことで力の必要性というか、その威力を使うことを奨励したり、又自らも実行する体育科以外の先生も出てきたりします。そして約束やルールを守らせること、校則を徹底させること。静かさを保たせることを体育科教員にまかせる校風が出来てしまっています。

保護者の中にも「厳しい姿勢」や「しつけ」を学校に多く期待します。直接的には保護者の期待する担任として体育教師が望まれるのです。今、力を抜いた、のんびり担任をしておりますと生徒の自由な動きが手にとるように見えてきます。一例をあげますと、清掃等の仕事を生徒がどう責任を果すのかということで、生徒の様子が担任の態度でずいぶんちがってくるということがわかります。厳しい担任、たとえば体育系の担当教員が担任をしますと、清掃をさばったりする生徒が皆無で、さらに徹底した清掃をします。しかしそれが力に対しての恐怖心や服従であるかは、同じ生徒達の色んな教科での学習態度や、クラスが変った時に答が出ます。また提出物等に於いても厳しい、すぐしかる先生の場合はどんな書類も期限内には完了します。がその生徒達は他の教科の提出物、作品創作、学習姿勢はひどい状態であることが多いのです。力で押さえている間は服従するが、それが本心からのものでなく、また心が育ったからでなく、ただ恐怖心であるとわかってしまいます。清掃を徹底させることも、提出物を期限内にあわすことも大切ですが、しかし本当に大切なものはもっとちがうところにあります。のんびり、ゆっくりに生徒と触れあうと生徒達は良い悪いの事実があるとしても本当の姿を見せてくれます。その時、どう指導するのか。どう判らせるのかが課題となります。

教科指導のあり方

整列をさせることから始まり、準備体操に入ります。教室での様子とは違い、すばやく、きちんと列をつくり、私語もありません。

これは安全教育・団体教育の一つとして徹底する必要があります。しかしきちんとらび、姿勢をのばし、無駄話をしない、その様子をみて、少し異様さを感じる教師がいます。また一方その様子にすばらしく感動する先生もいます。騒ぐことが好きで、しゃべることが楽しみな自由人である生徒達がこの時だけまったく違う人種になるのは大変不自然です。この生徒達がこの時間中皆同じ顔になるのです。この点が異様に感じるので、何故でしょう、何の力がそうさせるのでしょうか。体育はもつとのびのびとした様子が表現できるようにしたいものです。

カリキュラムは三年間を通じて多くの種目を学習します。その中で球技のしめる割合が多くあります。そして球技はゲームが主体となっています。基礎技術や指導しあうことなどはあまりなく、即ゲームをする場合もあります。

ゲームを通じ色々説明をすることもありますがこの学習のあり方が体育嫌いをつくっている要素となっています。つまりゲームとなると運動クラブの生徒は大活躍します。このゲームに教師も混ざって一緒にプレイをしますが、楽しみ、教師と笑い満足するのは先の運動クラブの生徒達だけです。しかし一方この様な授業をひたすら耐えている、ゲームの下手な生徒、下手ゆえにクラス仲間から馬鹿にされた生徒、いつも損な役や、弱いグループに入られる生徒達は指導教師の背をにらんだり、さげすんでいたのではないかと思えます。球技をはじめ色々な教材においても運動クラブ員を授業に使うと大変でうまく進行出来るといふことです。しかしそれは良くないのであります。

どの様な体育学習がのぞまれるか

今まで説明しましたことで明らかなように求められる体育の目標は「生徒が楽しく学習できるような授業であること。」体育を通して一生涯を健やかに過ごせる様な生活習慣をきづく能力を養うこと等です。体力向上や鍛錬は大事ですが、それよりも自分を、まわりを大切にすることを育てる教育・競争で他を負かす事を教えるのではなく、共に学習しあいお互いが生きることの出来る人間性を育てることが目標であります。しかし現実には今だ体力づくりの指導だけを唯一の教材としている学校が多くあるとききます。私達はかわらねばなりません。しかし私をも含む体育教師は大変忙がしいので変る為の研修や勉強が出来ず、本も読めない事が多いということですね。しかし何故そんなに忙がしいのか、主な理由としてクラブ活動の指導があるのです。毎日毎日、土曜日、日曜日、祭日もない位多忙ということです。体育教師の多くは学生時代から運動クラブを経験していますからあまり悲愴感を持っていない様子が見えず、クラブ指導においてはむしろ生徒を育てていることを誇りにし、使命感を持っていきます。しかしクラブ活動と授業とはちがうのであってその点を考慮しなければならぬと考えております。同志社中学では一年生と三年生は週一回の保健の授業を持っています。生活する上での基本的衛生知識や社会とのつながりを学習しますが、どうしても教科書や参考書からの教材に限られます。視聴覚教室や専門の施設が求められています。プールがありません。小学校で育てられた能力が同志社中学ではそれ以後の育成がありません。生涯教育の教材と

して最適であります水泳の学習が求められています。

さて近年喫煙者に対して大変立場の弱い状況となってきました。この状況に逆らうがごとく喫煙にしがみついている方々がおられます。体が要求するのか、我まんが出来ないのか、計れないのです。が、とにかく禁煙の努力をしてはいかがでしょうか、三日禁煙、三日喫煙、それでも良いではないですか、とにかくひかえて下さい。学校という若い人々の前、生徒の前では喫煙を絶対にしないで欲しいと思っております。私自身、長い時間の習慣をたち切ってから八年程になります。自分を大切にする様に、他人をも大切にしましょう。近頃、教えることはともかく育てることの難しさをひしひしと感じてしまいます。しかし実のところ今まで何も教えていなかったかも知れないと思ったりもします。大変恥ずかしくなります。これを機会に他教科・他学校の教えを頂きたい。

(中学校教諭)

